中居林小

主体的に学び合う子どもの育成

～ 共に学ぶ楽しさを実感させる指導の工夫を通して ～

（３年計画の３年次）

校長　齋藤　和香美

１　研究主題について

本校では、昨年度より教育目標を「自分を育てる子」とし、自己を振り返りながらよりよい自分を目指して努力し、自分を高めていく子を育むこととした。また、努力目標の一つとして「自分の考えをもち進んで学習する子」を掲げ、相手の考えを理解するためによく聞き、自分の考えと比べたり質問したりしながらよさに気付く、共に考えを創り上げる、協働して課題解決する子を目指している。今年度の学校目標は「他者とかかわり自分を高める子の育成」とし、自分のよさを知り自分を大切にすることを通して人とかかわる力を育み、自分を高めることを目指す。

昨年度の校内研究では「主体的に学び合う子どもの育成」２年目の取組として、全ての児童に学ぶ意欲をもたせ授業を充実するために、導入では問題提示を工夫したり、前時の振り返りを生かしたりした。これにより児童は問いをもち、解決の見通しを立てて自信をもって問題解決に向かうことができた。自力解決では式や図、言葉、数などを使ってノートに考えを書き、考えを可視化したノートをもとに友達同士で交流し、加筆や修正を加え学び合った。終末の振り返りでは、板書からキーワードを選び短時間でノートに書くことができるようになった。

課題としては、①自力解決で下位の児童も考えを可視化できるようにするための授業の在り方を研究し日常化していく（関係図、テープと数直線図、表やグラフ等の表し方があるが、下位児童に寄り添うために、何で表すか何を使って考えられそうかを全体共有してから自力解決に入る。）　②対話（児童と児童、児童と教師）を通して児童の考えを明確にし、課題を解決していくために、学年相応のスキルを習得させる（図や表の使い方、話型、パターン化）、　③コロナ禍における対話的な学習の在り方を研究していくことが挙げられた。

本校児童の実態として、CRTの意識調査結果から「主体的に学習に取り組む態度」 は全学年ともにＡの児童が少なくＢとＣが多い傾向にある。日頃の様子を見ていても、決められたことを行う素直さはあるが、自分で考えて行動したり失敗を恐れずに前向きに取り組もうとしたりする意欲が低く、学習に対して自信をもてない児童も多く見られる。全ての児童に学ぶ意欲をもたせ共に学ぶ楽しさを実感させるためには、既習事項の何が使えるか、どのように使って考えるかを全体で共有し、解決の見通しをもたせることで、解決できた達成感や充実感を味わわせることが大切であると考える。また、自分一人で考えるのではなく他者との対話を通して課題解決を行い成功体験を積み重ね、自信をもたせることも必要である。

今年度は、算数科で児童が意欲をもち、対話（児童と児童、児童と教師）を通して児童の考えを明確にし、課題を解決していくために、対話的な学習を支える力として学年相応のスキルを習得させ対話力も育成していきたい。自分の考えを可視化させながら、他者との対話を通して共に学び合い問題解決する授業づくりを目指し、本主題を設定することとした。

２　研究のねらい

共に学ぶ楽しさを実感させるための効果的な指導の在り方について、算数科の授業実践を通して明らかにする。

３　研究仮説

共有した問いの解決に向けて、対話を通して協働的に学ぶことによって学ぶ楽しさが実感ができ、児童の学習意欲が高まり学習の理解も深まるのではないか。

４　研究内容

(1) 既習を意識した導入の工夫
(2) 自分の考えを可視化し、対話を通して学び合うための工夫
(3) 学びを実感するための振り返り活動の在り方

５　研究の経過

(1) 研究仮説に基づく研究

月	日	内　容
７	７	第１回授業研究（要請訪問）（３学年）授業者　馬渡静香 「棒グラフを使って」　講師：八戸市総合教育センター　副所長　松橋祐哉　氏
		自分の考えの根拠となるところに印を付ける、グラフの縦軸の数字を指で指し示す、言葉を付け足すなど可視化させる。考えを伝え合う場面では、ワークシートを見たり指差ししたりして考えの根拠を示しながら説明させた。
９	１	第２回授業研究（２学年）授業者　大河ひとみ 「１００をこえる数」
		数字カードを並べたり、ペア、グループでの大きさ比べをしたりすることで、大きいと言えるわけを考えたり説明したりしながら、対話を通して学び合わせた。
１１	１０	第３回授業研究（要請訪問）（５学年）授業者　山口義始 「平行四辺形の面積」　講師：八戸市総合教育センター　副所長　松橋祐哉　氏
		ワークシートの図に矢印や線、式等を書いて自分の考えを可視化させる。全体対話では、変形方法についてリレー方式で発表させ、新しい考えを全体で共有し、式に結び付けて考えさせた。

(2) 一般研修

月	日	内　容
４	１４	今年度の研究について、学習用コンピュータ活用研修①「リモート授業」
５	１２	道徳科に関しての研修　提案授業（本校　道徳教育推進教師　安ケ平祐美子）
６	２３	学習用コンピュータ活用研修② 「一人一台端末の活用」について　　総合教育センター　主任指導主事　大下洋一　氏
８	１８	小・中学校ジョイントスクール推進事業　第一中学校区第二回合同研修会
		学習用コンピュータ活用研修③「端末持ち帰りに向けて」 クラスルームの活用、クロムブック活用推進プラン案について
８	２５	県学習状況調査（５学年）
９	２２	学習用コンピュータ活用研修④「Meet」
１０	１３	学習用コンピュータ活用研修⑤「休校中のオンライン授業」
１１	２４	日常の授業実践について
１	１１	日常の授業実践発表（各学年、みどり学級）、Q-U　結果の考察と全体共有（研修主任） 学習用コンピュータ活用研修⑥「ジャムボード」

６　研究の成果

(1) 導入時に前時と本時の違いを明確にして問いを共有する学習の流れを積み重ねた。このことにより、児童が課題解決に意欲的に取り組むことができるようになった。
(2) 考えの根拠を印や直線、言葉を付け足すなどの方法で可視化させたことは、双方向の対話を生み、友達の考えを全体で共有することに有効であった。
(3) できるようになったことやもっと考えてみたいことを書かせたり、説明させたりしたことは、自己の学びを確認したり変容を自覚させたりすることに有効であった。

７　研究の課題

(1) 児童が自分の考えをもつためには既習内容を想起することができなければならない。また、考えに自信がもてないのは根拠を明確にできないからである。日頃から、既習の知識や経験と関連付けて考えさせるような指導の工夫が必要である。
(2) 考えを可視化させる手立てとして有効な表現方法を共有し、今後も板書やノートの中で活用していきたい。(印や線、記号など、簡単で誰が見ても分かる表し方に慣れさせる)
(3) 対話の基礎となる聞く力が十分でないため、深まりがなかった。発表の内容を考えさせながら対話させていく指導の工夫が必要である。

（記入者　佐々木　直子）